

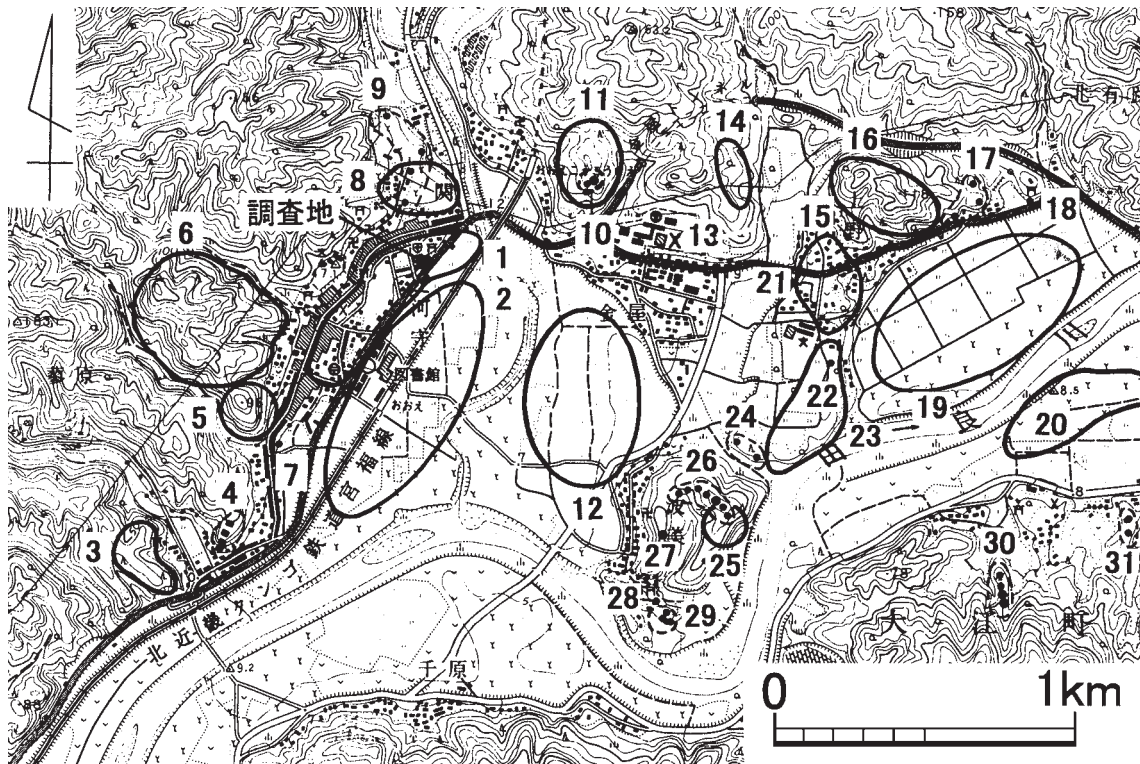
# 1.河守北遺跡第8次発掘調査報告

## 1. はじめに

河守北遺跡は京都府福知山市大江町河守に所在する。当遺跡の東側には、近畿地方北部の由良川が流れ、北側はその支流である宮川が流れ、遺跡は両河川を望む低位段丘上に位置している。

今回の発掘調査は国道175号新設改良工事に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施した。調査面積は150㎡である。発掘調査は平成21年4月30日～同6月16日まで行った。現地調査は調査第2課課長補佐兼第1係長小池寛、主査調査員柴暁彦が担当した。

調査地背後の丘陵には、河守城などの中世城郭の曲輪に伴う平坦面が残っており、山麓には中世から続く神社・仏閣が存在し、また山麓沿いには丹後宮津へ抜ける街道が通り、宿場町として栄えていた。現在も旧街道に沿って短冊状に広がる町並みの景観が残っている。調査期間中は京



第1図 調査地位置図および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 河守)

- |            |            |               |           |             |
|------------|------------|---------------|-----------|-------------|
| 1. 河守北遺跡   | 2. 河守遺跡    | 3. 蓼原城跡       | 4. ヲカ古墳群  | 5. 新治城跡     |
| 6. 河守城跡    | 7. 新町古墳    | 8. 段遺跡        | 9. 段古墳群   | 10. 小山端古墳群  |
| 11. 金屋城跡   | 12. 金屋波美遺跡 | 13. 芝居原遺跡     | 14. 柏谷遺跡  | 15. 上野古墳    |
| 16. 阿良須城跡  | 17. 阿良須古墳群 | 18. 阿良須神社境内古墳 | 19. 阿良須遺跡 |             |
| 20. 高川原遺跡  | 21. 上野遺跡   | 22. 大良古墳      | 23. 平遺跡   | 24. 仲仙古墳群   |
| 25. 波美城跡   | 26. 波美古墳群  | 27. 大久保古墳     | 28. 宮裏古墳  | 29. 波美官山古墳群 |
| 30. 大山田古墳群 | 31. 丸山古墳群  |               |           |             |

都府教育委員会、福知山市教育委員会、地元住民の方々、調査補助員にお世話になった。記して感謝する。<sup>註1</sup>本調査報告は柴が執筆した。

## 2. 調査概要

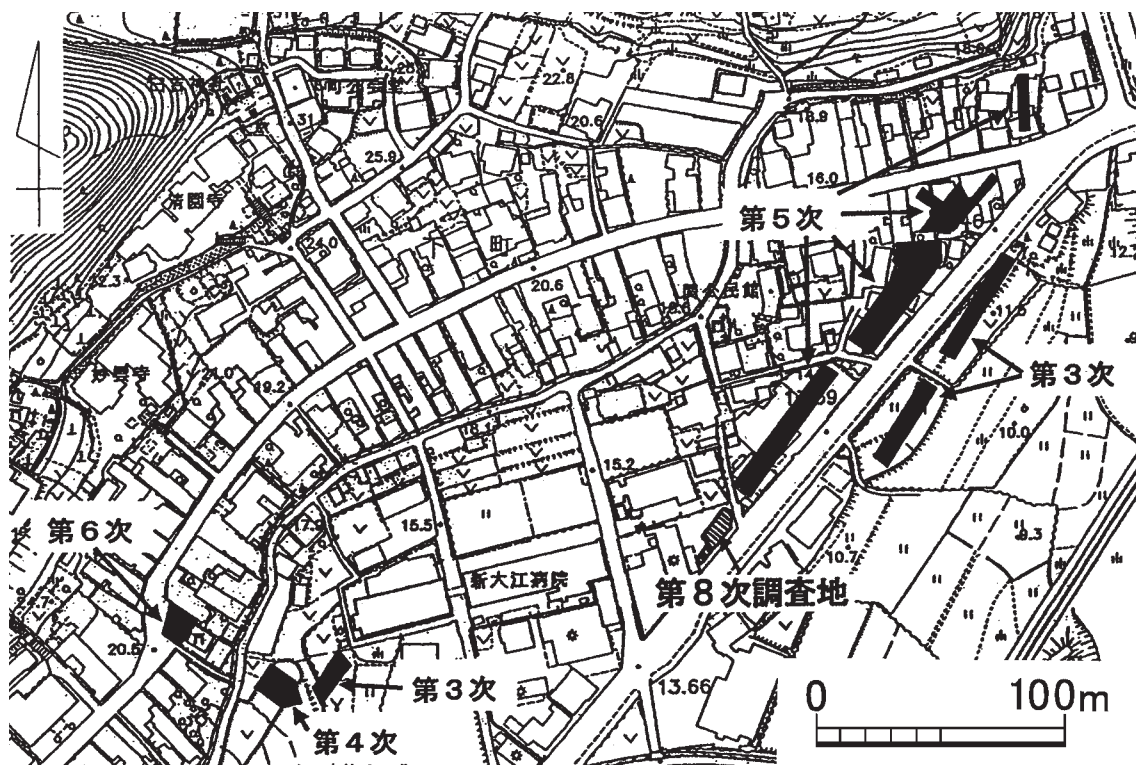
発掘調査は、重機により現代の盛り土層および近世以後に堆積した層を除去した後、人力により遺構精査および掘削作業を行った。以下にその概略を述べる。

層序(第3図)を見ると、既存建物の解体撤去後に0.6~1m程度盛り土がなされており(1層)、この層は土壤改良剤により地盤改良がなされ、固くしまった土層であった。その下層に2面の水田面(2・3層)が存在した。さらに洪水層(5層)を介してもう1面の水田面(6層:18世紀)がある。水田面の下には17世紀の遺構検出面があり(7層)、その直下に磨滅した土器片を含む包含層(8層)が堆積している。遺物包含層からは、古墳時代から近世にいたる時代の土器や古代の瓦、中世の軒平瓦、土錘などの遺物が出土した。包含層を除去した面は古墳時代中期(5世紀前半)の遺構検出面であった。

### 1) 検出遺構(第4図)

(1) 下層遺構 断面では包含層から遺構が掘り込まれていることが確認できたが、平面では包含層を除去した段階で明確に検出できた。遺構には5世紀代の土坑およびピットが含まれるが、大半は時期不明の土坑・柱穴群である。古代・中世・近世の遺構も含まれると考えられる。5世紀前半の遺構は、調査範囲が狭いため、建物としての復元は不可能であった。

そのなかで、土坑S K 46は長さ約1m、深さ0.3mを測る長楕円形の土坑である。埋土は暗茶

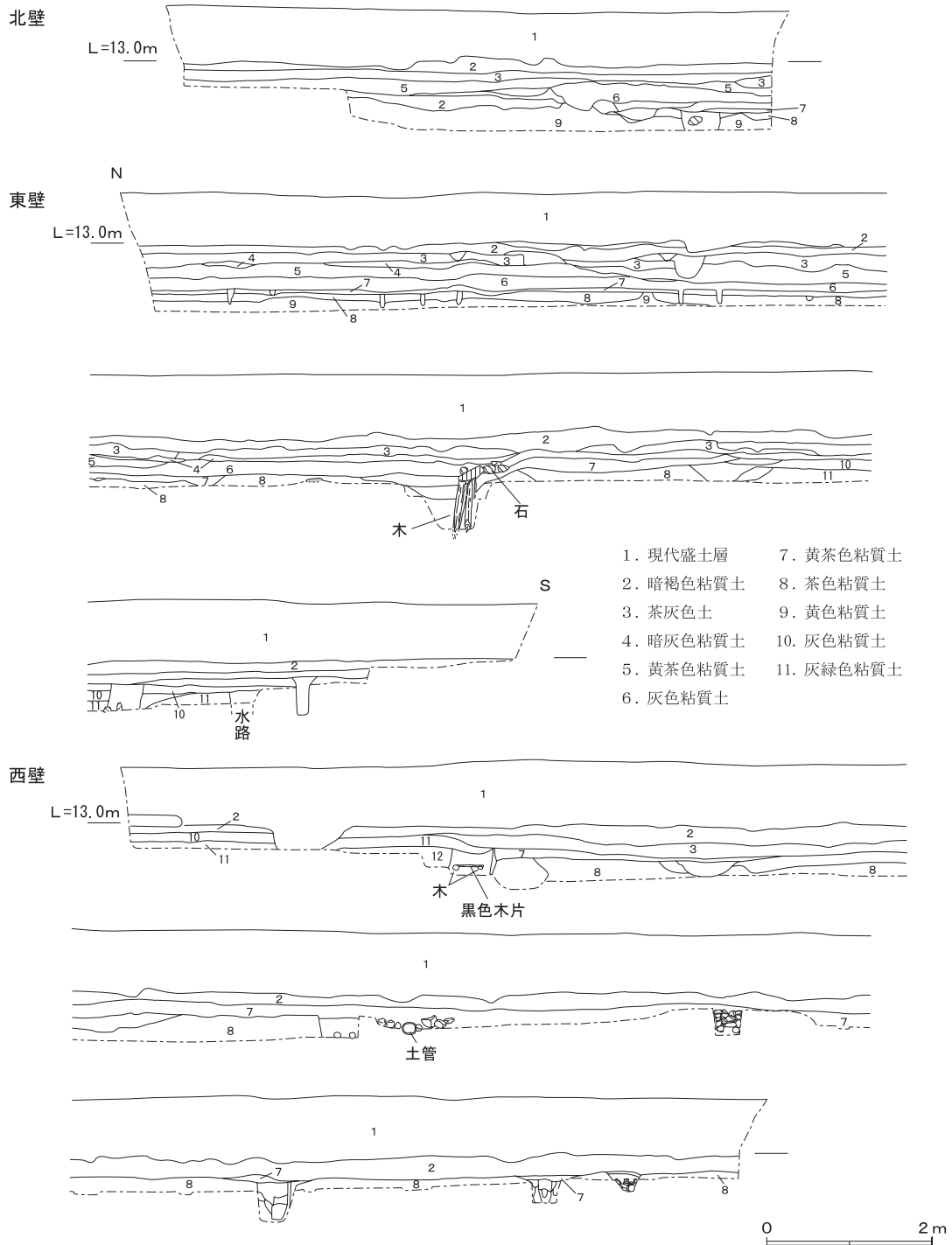


第2図 調査トレンチ配置図(『福知山市文化財調査報告書』第53集 第1図に加筆)

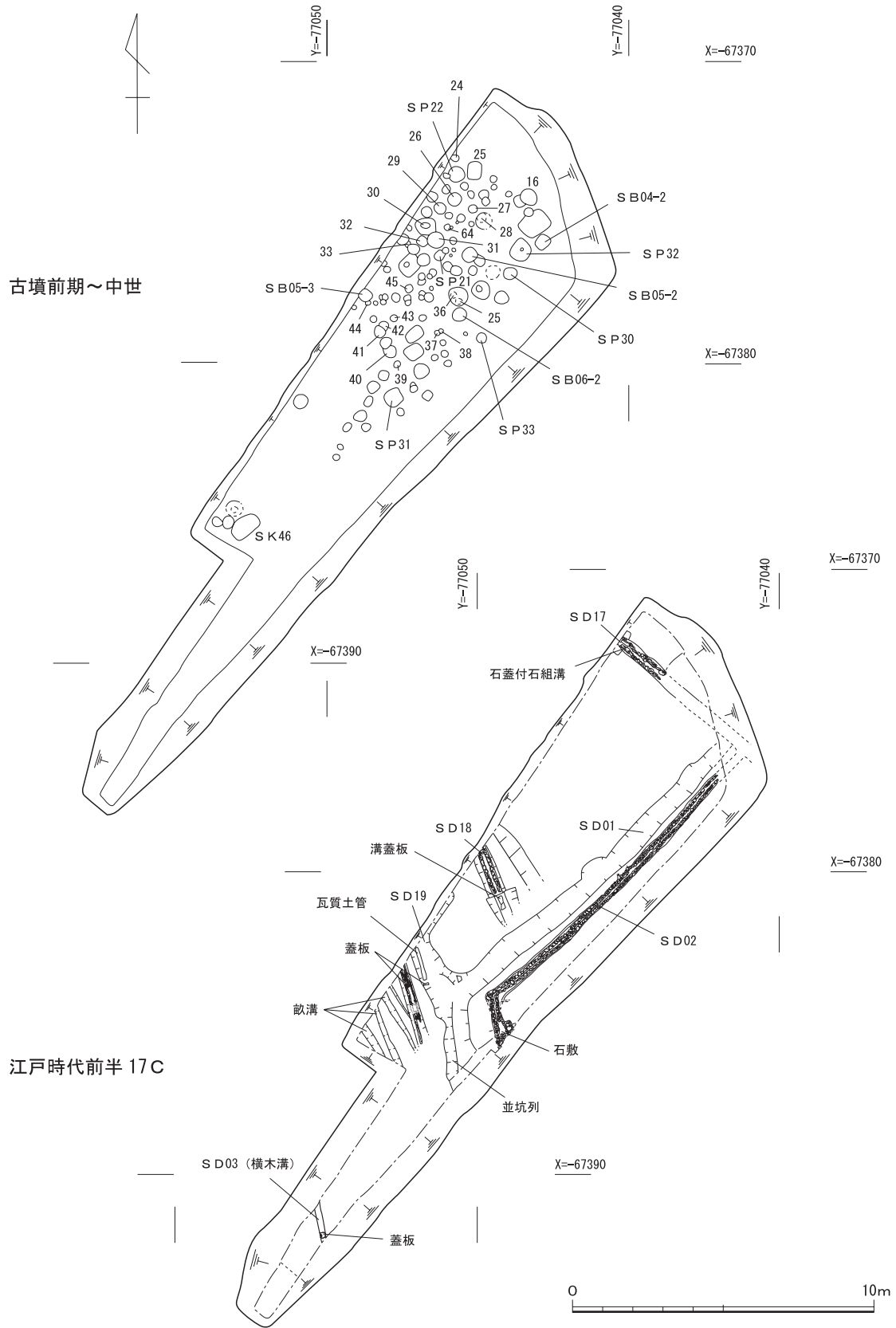
褐色粘質土で、須恵器の壺(第7図1)が出土した。

またピット3は直径0.4mを測り、深さ0.5mを測る。埋土中から管玉(第7図9)と緑色凝灰岩製の擦り切り施溝のある玉未製品が出土した。

(2) 上層遺構 17世紀初頭の屋敷地の区画を検出した。山裾から扇形に広がる地形に沿うように石組および木組みの暗渠状構造を持つ上水施設が造られ、また屋敷地の外周には、生活用水を流すための素掘り溝も計画的に配置されていた。以下に遺構の概略を記す。



第3図 調査地土層図



第4図 検出遺構平面図

溝SD01 北東方向から南西方向に流れる幅1m、深さ0.25mを測る素掘りの溝である。断面は浅い皿状をなす。北東側は調査地の断面にかかり、さらに延伸する可能性がある。長さ8m分

を検出した。埋土は暗灰色粘質土である。屋敷地の周囲を巡る排水溝と考えられる。南西部で、北からの溝と合流し、南へ折れ曲がる。溝の南寄りでは、護岸用の杭列を検出した。出土遺物は陶磁器、すり鉢、平瓦、金属製品、瓦質土管などがある。溝S D19との関係は不明である。

**溝S D02** 北東から南西に流れる石組溝で、幅0.35m、長さ約7.5mを検出した。調査地の北西側に位置する溝S D17から導水したものと考えられる。細部構造は溝の掘形に沿って、両側面に拳大の川原石を並べ、扁平な円礫を蓋石としていた。さらにその上面に蓋石を固定するように礫や平瓦片を充填し、暗渠状をなしていた(第5図、図版第5-(1))。通水部の幅は約3cmを測り、埋土は暗灰色の粘質土が詰まっていた。北西側の粘質土の下層には粗砂が見られ、北西から南東方向に水が流れるように緩傾斜がつけられていた。南西側で東へ「L」字状に屈曲し、調査地東壁で石積みの溜め枿を検出した。溜め枿の規模は0.6×0.7mの方形で、深さは検出面から0.5mを測る。枿の周囲は拳大から人頭大の円礫を2～3石貼り付けていた。溜め枿には調査中も湧水があり、生活用水の溜め枿として使用されていたと考える。

**溝S D03** 幅0.3m、検出面からの深さ0.3mを測る木組み溝である。溝底部に直径5cmの丸太を両側面に敷設し、その上を溝に直交するような状態で、板状の蓋板が3枚残存していた。溝内には暗灰色粘質土が詰まっていた。断面の観察では、暗渠構造となっている(図版第10-(2))。

**溝S D17** 幅0.4m、深さ0.3mを測る石組み溝である。人頭大の花崗岩などの礫が使用されており、溝S D02と比較してやや粗雑な造りであった。通水部の幅は5cmを測る。蓋石を固定するために礫を充填し埋め戻していた。

**溝S D18** 石組溝と素掘り溝に蓋板材が付く複合構造の溝である(第5図、図版第7-(2)・(3))。蓋板材の上には、粗朶が堆積していた。また、素掘り溝の底部には有機質が腐食したことを示す土色の変化が認められたことから、溝には底板が残存した可能性がある。

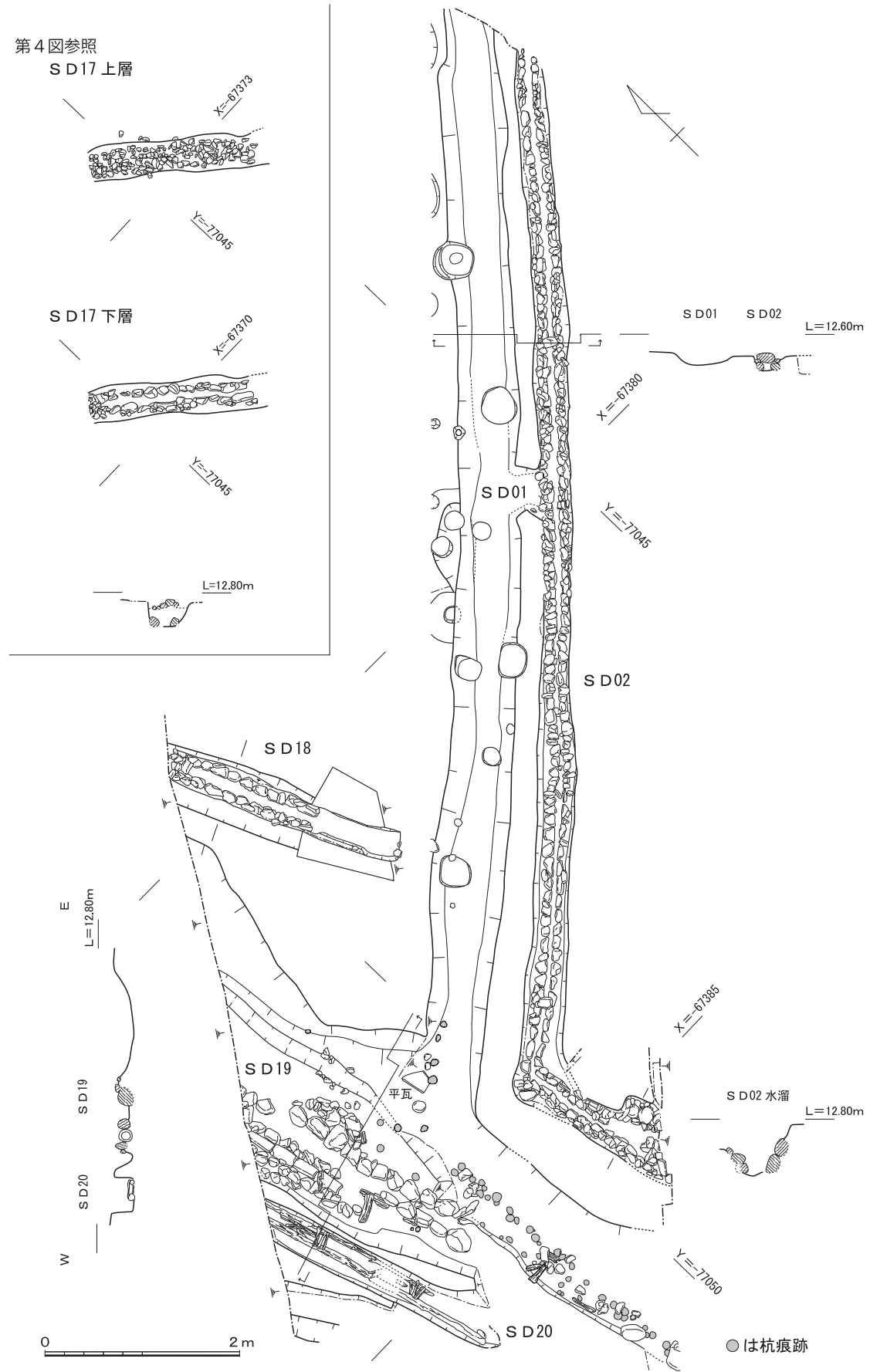
なお、溝S D18の南西側は盛り土による整地層があり、北東側より土地が一段高くなっていた。

**溝S D19** 北から南へ流れる瓦質土管を利用した上水施設である。溝S D01と重なるように敷設され、北側部分は5本の土管が良好に残存していたが、南側は溝S D01の肩部分に直交するように、多数の杭が打ち込まれていた。この杭列は土管を敷設する基礎となっていたものと思われる。これは、溝S D01を流れる下水が、上水と混じらないように工夫されたものと考えられる。溝は土管→石組み→素掘り溝と数回にわたり改修が見られた。これは谷水を導水したため、土管内部には泥質土が詰まっており、送水量が減少する度に改修の必要が生じたことが理由と思われる。この上水施設は溝S D02で囲まれた屋敷地のさらに東側へ導水するためのものとする(図版第6-(3)、第7-(1))。

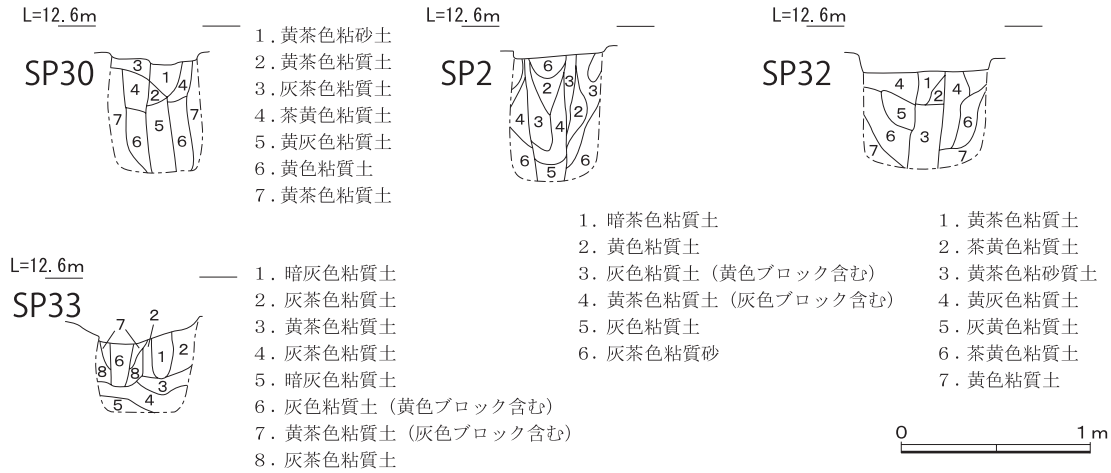
**溝S D20** 幅0.4m、深さ0.3mを測る木組み溝である。断面が箱形の掘形両側面に丸太を杭で固定し、蓋板を被せて埋め戻した埋設溝である。溝S D03と同方向で類似した構造を有するため、同時期のものと考えられる(図版第7-(1)、第10-(1))。

**畝溝群** 溝S D20の南側で、皿状の断面をなす4条の畝溝を検出した。溝S D20より先行する。

**整地層** 溝S D01の南側から溝S D03の間は遺構が見られず、礫混じりの黄褐色土で整地され



第5図 溝SD01・02・18~20実測図



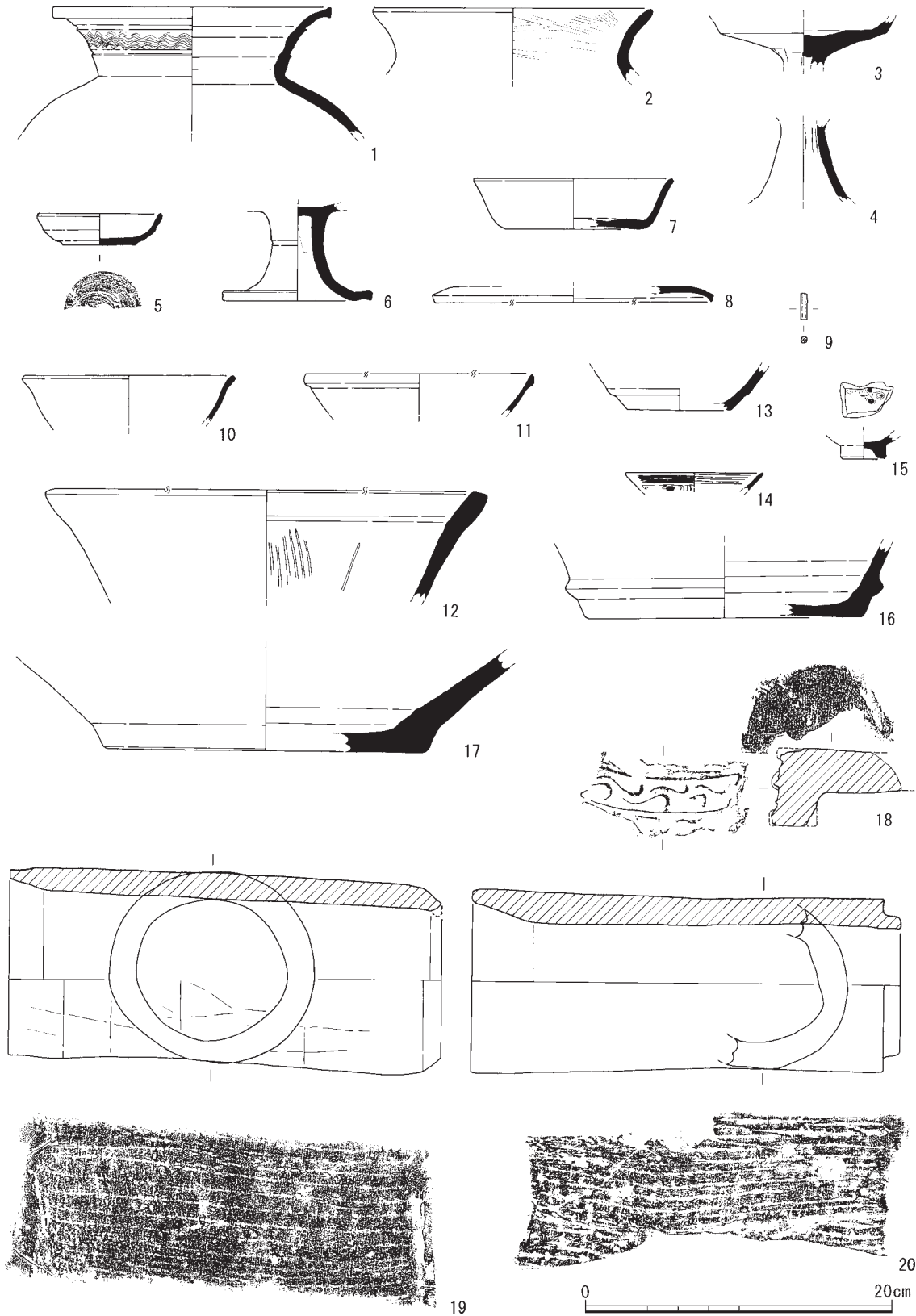
第6図 ピット断面実測図

ていた。屋敷間の通路部分と考えられる。

### 3. 出土遺物(第7・8図)

出土遺物は、上層遺構に伴う輸入陶磁器、肥前系磁器、播鉢、刀子状製品、不明金属製品などと、包含層から出土した黒色土器、瓦質播鉢、軒平瓦などと、下層遺構の土坑やピットから出土したものがある。

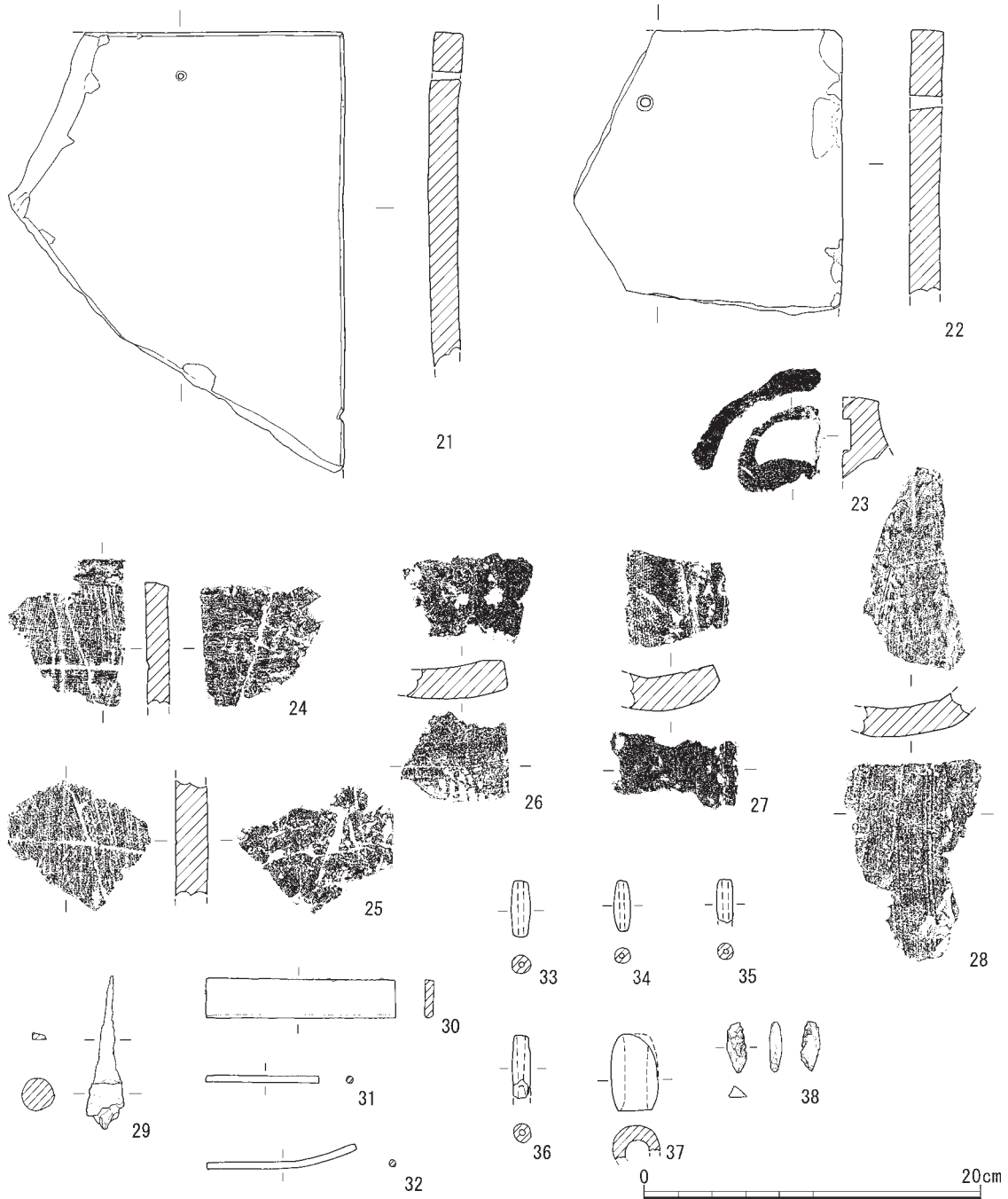
古墳時代の遺物は須恵器、土師器、管玉がある。1は土坑S K46から出土した須恵器の壺である。復原口径は18cmを測る。頸部の凹線間に櫛描き波状文を施す。色調は内外面とも青灰色をなす。焼成は良好である。2は土師器甕の口縁部である。内面に粗いハケ調整が残存する。色調は淡褐色をなす。3・4は土師器の高杯である。5～8は須恵器である。5は杯で、復原口径は8cmを測り、器高は2.1cmである。底部に回転糸切り痕が残存する。溝S D01から出土しているが、混入品と考えられる。6は高杯脚部で、色調は淡灰色をなす。7は杯Aで、復原口径は12.9cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色をなす。8は杯B蓋である。9の管玉は蛇紋岩製で、長さ1.7cm、幅は0.4cmを測る。両面穿孔である。そのほか擦り切り施溝のある緑色凝灰岩製の角柱体状未成品も出土した。管玉および未製品はピット3から出土した。10～14、16は包含層、15は溝S D01、17は溝S D03から出土した。10は青磁碗の口縁部片で、施釉の色調は淡緑灰色をなす。11は白磁碗口縁部片である。12は瓦質すり鉢で、復原口径は27.6cmを測る。内面のすり目は粗い。13は天目茶碗で、釉調は淡黒茶色、露胎部の胎土の色調は淡褐色をなす。14は肥前磁器である。15は輸入陶磁器と思われる碗の底部片である。底部の復原径は2.8cmを測り、胎土の色調は淡白色をなす。16は焼き絞め陶器の甕または鉢の底部片である。外面に隆帯状の貼り付け突起が見られる。17は鉢底部である。18は包含層から出土した軒平瓦片である。焼成は良好で青灰色を呈し、須恵質である。16世紀後半のものと思われる。19・20は瓦質土管である。19は溝S D19、20は溝S D01の水の落ち口部分に使用されていた。19の他に同形態の土管が3個体結合された状態で出土した。19は結合部を差し込むタイプである。20の土管結合部は有段のソケット状をなす。1点のみ出土した。21・22は平瓦片である。21は溝S D01の埋土内から出土した。目釘穴



第7図 出土遺物実測図(1)

が確認できる。22は溝 S D19から出土した。23は巴文の瓦片の可能性もある。全体の色調は淡褐色をしている。24～28は奈良・平安時代の瓦片である。29は刀子と思われる金属製品である。現





第8図 出土遺物実測図(2)

存長9.1cm、最大幅2.2cmを測る。30~32は用途不明の鉄製品である。溝S D01から出土した。30は板状品である。長さ11.35cm、幅2.4cm、厚さ0.55cm、重さ105.4gを測る。31・32は棒状品である。31は長さ6.75cm、幅0.4cm、重さ6.5gを測る。断面は円形である。32は長さ8.9cm、幅0.4cm、重さ8.4gを測る。31・32とも長さの違いはあるものの、直径は一致しており、いずれも端面は残存しているため、一定規格の棒状品を切断したものの可能性がある。33~37は土錘である。33は重さ4.8gを測る。34は3.1gを測る。36は重さ4.3gを測る。37を除き、長さ3cm前後、幅1cm前後の小型品である。37は長さ4.5cm、幅2.75cm、穴の口径は1.4cmを測る大型品である。

残存する重さは18.6gを測る。38は包含層から出土した良質な緑灰色チャートの剥片である。長さ3cm、幅1.15cm、重さ2.2gを測る。人為的な加工痕が見られる。

#### 4. まとめ

今回の発掘調査では、上層遺構として整然と配置された石組みや木組み溝、瓦質土管を敷設した溝、石組み溝の末端には石組みの溜め桝(上水施設)や素掘り溝(排水施設)などを検出した。これら一連の遺構は、出土した遺物から17世紀前半に作られ、その後改修が行われた。

国道175号線が開通する以前の主要路は西側の山裾を抜ける道筋であり、近世の街道筋には、宿場町として短冊状の街割りが成立した。その後、江戸時代中期に数度の大火で町屋が焼失しているが、現在も短冊状の街割りは継承されている。

その街道筋から由良川寄りの一段低い段丘部分で、17世紀前半の屋敷に関連する遺構が見つかったことは注目に値する。

屋敷建物の本体は、遺構の状況から今回の調査地の溝S D01および溝S D02の東側に想定できるが、残念ながら後世の水田開発で削平された可能性が高い。また近世の瓦は福知山市内では、福知山城を除くと初めての出土であり、この点が重視できる。

木組み溝は溝S D03と溝S D20の2条が、互いに平行している。両溝間は幅5mを測り、通路に伴う側溝と考える。

文献によると17世紀前半、河守の地は宮津細川藩領となっており、当遺跡は福知山城と丹後宮津城との中間地点に位置し、細川藤孝の家臣であった人物の屋敷が推定される。今後の周辺での調査に期待したい。

また下層遺構は、古墳時代中期のピットを含め、多数のピットを検出したが、調査地の幅が狭かったため、建物跡として復原はできなかった。しかし、周囲には、古墳時代の遺構は良好な状態で残存しているものと考えられる。当調査地北側の第5次調査においても遺構および遺物が確認されており、調査地周辺の平坦地には古墳時代の集落が展開している可能性がある。

注1 調査において以下の方々のお世話になった。記して感謝の意を表します。八瀬正雄、松本学博(敬称略) 調査参加者(敬称略) 奥田栄吉、真下春美、小島健之介、丸谷はま子

注2 1587年小野木重勝が福知山城主となるが、1600年の関ヶ原合戦で自害し、その後の福知山城主は有馬豊である。

#### 参考文献

- 松本学博「Ⅱ. 河守北遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第53集 福知山市教育委員会) 2007  
松本学博「Ⅲ. 河守北遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第55集 福知山市教育委員会) 2008  
戸原和人「3. 河守北遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査報告集』第130冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007  
石尾政信「6. 府道八幡木津バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第77冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997

# 圖 版



(1)河守城跡からの遠景  
(南西から)



(2)調査前の状況(北から)



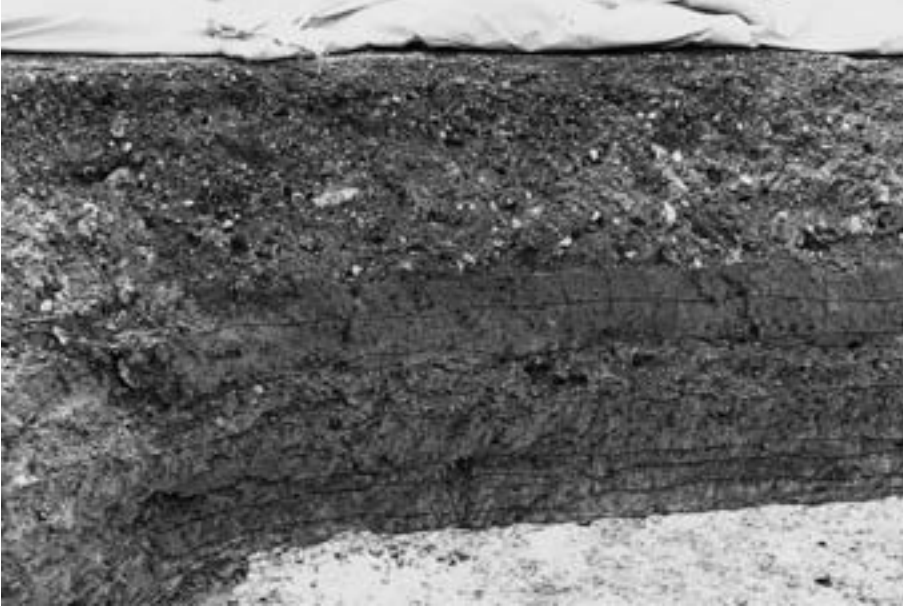
(3)掘削前の状況(北から)



主要遺構全景(南西から)



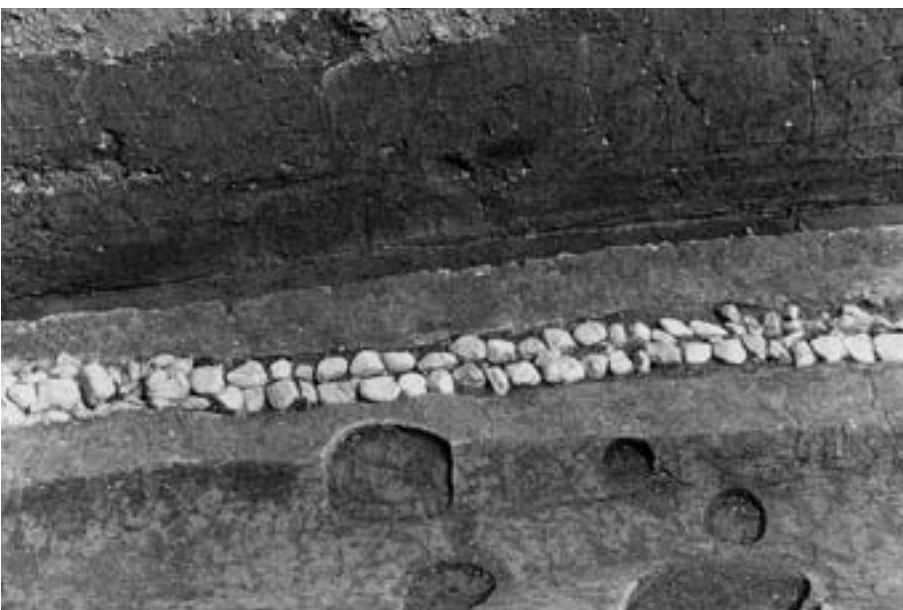
上層遺構近景(北東から)



(1)土層堆積状況(北西から)



(2)土層堆積状況(北西から)



(3)土層堆積状況(北西から)

(1) 溝SD02検出状況近景  
(北西から)



(2) 調査地全景(南西から)



(3) 溝・ピット検出状況(南西から)







(1) 溝SD01(右)および溝SD02  
掘削状況(北東から)



(2) 検出遺構近景(北東から)



(3) 溝SD19検出状況(南東から)

(1) 溝SD19および溝SD20  
検出状況(南東から)



(2) 溝SD18検出状況(南東から)



(3) 溝SD18蓋板検出状況  
(南東から)





(1)溝SD18蓋石・蓋板除去後(南東から)



(2)溝SD19(中央)および溝SD20(左)の状況(南東から)



(1) 溝SD01杭列の状況(南東から)



(2) 溝SD01杭列の状況(北西から)



(3) 溝SD02完掘状況(北東から)



(1) 溝SD20断面状況(南東から)



(2) 溝SD03掘削状況(北西から)



(3) 溝SD02南半部の状況  
(北東から)

(1)溜め柵全景(北西から)

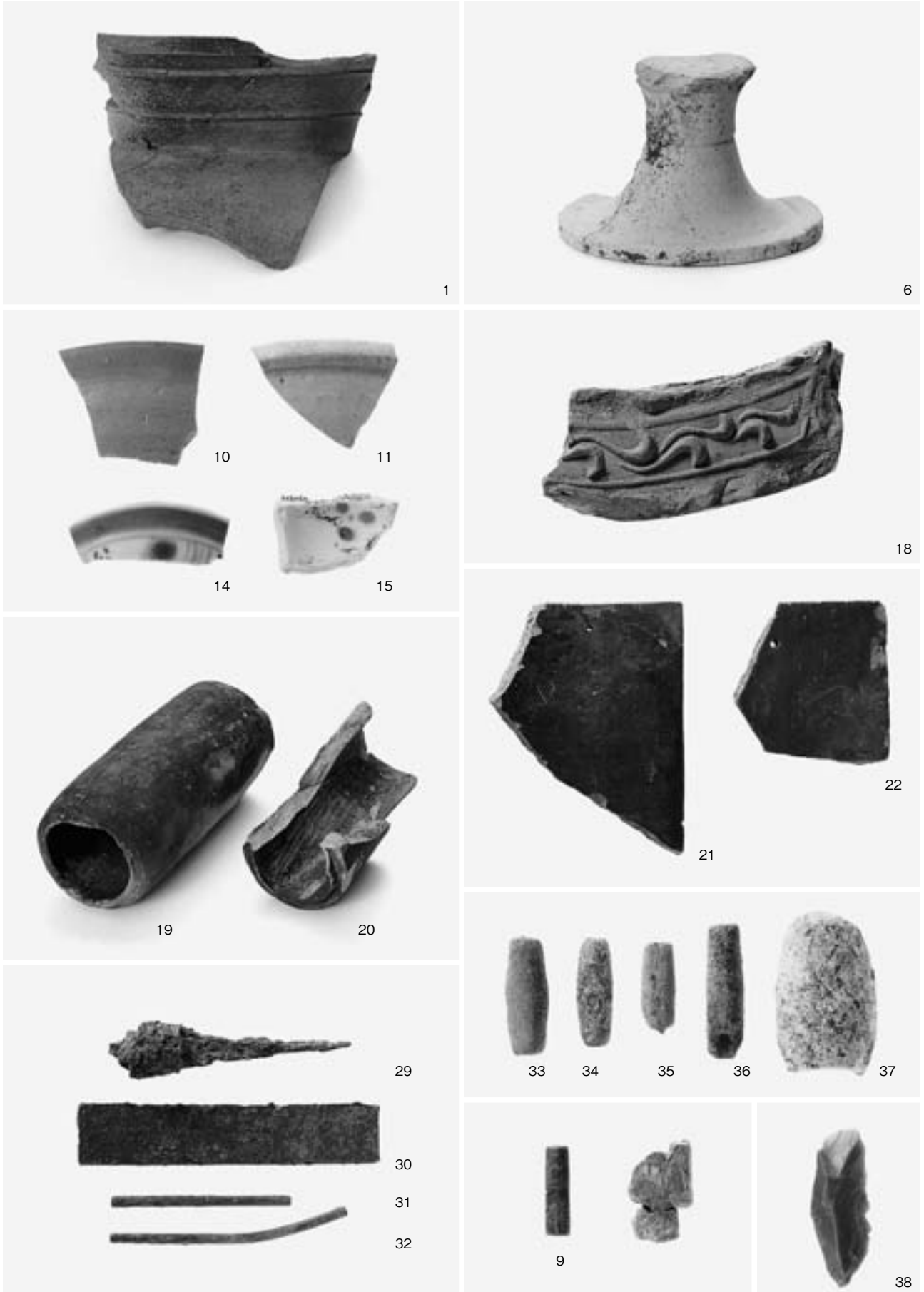


(2)溜め柵近景(南西から)



(3)溝SD02屈曲部近景(南西から)





出土遺物(番号は実測番号に対応する)

京都府遺跡調査報告集 第 137 冊

平成22年 3 月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141